

ドイツ初期ロマン主義における 「女性と創造力、女性の創造力」について ～カロリーネの場合

中井 章子

<要旨>

「女性と創造力、女性の創造力」というテーマを、初期ロマン主義グループのカロリーネの例をとおして検討する。ノヴァーリスのような初期ロマン主義者にとって、「創造力」は人間にとって本質的に重要な要素である。「創造力」は、すでに認識において働いており、芸術創造の行為は認識においても働く「産出的想像力」をさらに強めた活動である。男性性と女性性は、人間を構成する二元的要素である。芸術的知的創造活動とは、人間的なものであって、男性性も女性性もともに寄与する。1800年前後の時代において、カロリーネは、手紙や社交のなかで、知的創造力を発揮している。初期ロマン派のグループ、この短い期間に限ってみると、カロリーネのような女性は、影のような存在ではなく、太陽のような、知的エネルギーの源となる存在であった。

キーワード：女性、創造力、想像力、ドイツ初期ロマン主義、ノヴァーリス、カロリーネ
Keywords: women, creativity, imagination, early German Romanticism, Novalis, Caroline

1. はじめに

本稿では、「女性と創造力、女性の創造力」というテーマについて、ドイツ初期ロマン主義(初期ロマン派)という、18世紀終わりから19世紀初めの時期、すなわち、ヨーロッパの近世から近代への転換期に、ドイツのイエーナに集まったグループを取り上げる。そしてそのグループに属すノヴァーリスの著作をとおして、「創造力」について考え、カロリーネをとおして、「女性」について考察したい。ロマン主義における「創造力」についても、「女性」についても、すでに多くの研究がなされている。本稿では、研究の蓄積をふまえ、とくに、ノヴァーリスとカロリーネのあいだに交わされた書簡を検討する。

2. ロマン主義における「創造力」～「芸術」「ポエジー」「創造的想像力」

ここでは、ノヴァーリスによって、「創造力」について考えることにしたい。

ノヴァーリスにおいて Kreativität という言葉は見当たらない。しかし、人間の「創造力」、人間の「つくる」力は、思想の中心にあり、「芸術」Kunst や、「ポエジー」Poesie

や、「産出的想像力」 produktive Einbildungskraft などの語からなる系に関わっている。

ノヴァーリスによれば、人間の認識はすでに「創造的」なものである。「知る」ことは「つくる」ことなのである。「観察」もただ受身で印象を受け取るのではなく、「能動的」で「活動的」であるといわれる。能動的に外界を経験する能力は、「産出的想像力」 produktive Einbildungskraft と呼ばれる。

「想像力」は、別な角度から表現するならば、「精神的なもの」と「感覚的なもの」を媒介する運動であり、「漂い」、「円運動」、「呼吸」などのイメージで表される。この能力は、人間のあらゆる活動の根源とされる。「想像力」は、外界の認識において働くだけではなく、外界から独立して働き、新たなものを作り出す力でもある。これは、芸術的な創造になる。

ノヴァーリスは、カントやフィヒテの哲学を踏まえつつ、芸術創造の方向に拡張したみずからの哲学を「魔術的観念論」 magischer Idealismus と呼ぶ。「観念」と「物」、「抽象的なもの」と「感覚できるもの」のあいだをつなぐ、双方向の運動が「魔術的観念論」であり、これは哲学をふまえた芸術創造になる。

「ポエジー」という言葉は、ノヴァーリスにとって、狭い意味での「詩」に限定されるのではなく、ギリシア語の語源にさかのぼる、「つくる」活動であり、「創造」という意味を帯びている¹⁾。

芸術家は、普通人ももつ、能動的に外界を経験する能力を自覚的に用いている。ノヴァーリスも「天才」 Genie という言葉を用いるが、「自然の天才」など、「自然」と深いつながりをもつ存在であって、「本能」 Instinkt と言い換えられるときもある(III, 462)²⁾。「自然の意を汲み、自然のガイスト(精神・霊)にかなうように行動」するのが「自然の天才」であると言われる(III, 179)。「天才とは内的複数 inneres Plural の結果」(III, 577)である、というのは、動物や植物のような自然をも含む他者を内にもつ存在だということである。このようにノヴァーリスにおいて「天才」は、超越的次元や自然といった、人間にとっての「他者」につながる存在と理解されている。「天才」は「才能」 Talent と対比されることがあるが、その場合、「天才」が「本能」に関わるのに対し、「才能」は「悟性」に関わる。

以上のような人間の「創造力」をめぐる思索の背景には、神の「創造」に対して、「神の似姿」である人間は芸術という「創造」活動を行うという、聖書にもとづく思考の型がある。神の創造を、人間の次元で反映しているのが、人間の創造的活動、芸・技・業・術である。このように、人間の「創造力」は、「神と自然と人間」という存在のカテゴリーの中の「人間」の特別な位置にもとづくのである。

その「人間」は、男性と女性という具体的なあり方とはどのように関わるのだろうか。ノヴァーリスにおいて、男性と女性というのは、自然にも存在する「二元性」の表れである。自然の二元性は、中国自然哲学の「陰陽」にも似た「男性性」と「女性性」である。

バロック時代の思想家であるヤーコプ・ベームには、原初の人間である「アダム」は本

来、男性・女性という二元性をこえた「両性具有」の存在であり、その完全な人間存在の第一の「転落」の結果が「男性」と「女性」というそれぞれ人間の半分でしかないあり方であり、「蛇の誘惑」による転落は「第二の転落」だという理解がある³⁾。このようにみると、「人間」は本来「両性具有」の存在であって、その部分として「男性性」と「女性性」がある。具体的な人間は、幾分かの男性性と幾分かの女性性をもち、そのときどきの社会にあって個人は、男性であったり、女性であったりするが、そのあり方は個性的なものである。ロマン主義的な「男性・女性」観として、男女を「相互補完的」「両極的」ととらえるというところがあるが⁴⁾、その背後には人間をほんらい両性具有的な、全体的存在としてとらえるヨーロッパ思想の系譜がある。そのような面からの全体的な「人間性」の深い理解は、性の区分がゆらぎ、さまざまな政治問題となっている現代において、アクチュアルな課題であろう。ノヴァーリスにも、全体的な人間理解と、男女性を相互補完的なものとする伝統は関わっていて、そこから「愛」の思想が生まれる。

ノヴァーリスは「人間」を「神」との関わりの中かでみている。人間は「神の子ども」「神になる芽」であり、「いつか父がそうであるところの存在になる」(Ⅲ, 253)。「神について叙述されていることすべては、人間の未来学を含んでいる」(Ⅲ, 297) などとも記されている。

3. 1800年前後ドイツ語圏の女性の状況とカロリーネ

18世紀おわりから19世紀はじめのドイツ語圏は、次第に女性の著作家が出てきた時代である。著作を出版した女性として、たとえば、テレゼ・フーバー、ドロテア・ファイト、カロリーネ・フォン・ギュンデローデ、ベッティーナ・フォン・アルニムなどの名前が挙げられる。彼女たちの多くは、市民階層ないし小貴族出身で、1770年から1790年のあいだに生まれ、フランス革命やナポレオン戦争を自覚的に経験した。しかし、市民としての権利はもたず、古典語学習や大学という高等教育からは締め出され、市民的職業につくこともありえなかった。このような状況の中かで、女性の識字率の高まりと私的な教育の可能性の増加によって、女性の読者層が生まれ、文学の成立に影響を与えるようになった⁵⁾。文学に関わるために必要な自由時間や経済的余裕をもつ女性たちは、みずから筆をとりはじめた。

この時代に「ジェンダー概念が整備」されていき、女性には主婦と妻と母の役割が割り当てられていき、「女性らしさ」と「創造性」が相容れないとされた様子を星野純子は、カント、フンボルト、シラー、ゲーテ、フィヒテを例に明らかにしている⁶⁾。「女性は文学創造の領域からは締め出され、繊細な女性的特質によって男性に靈感を与え、男性の想像力をかきたてる存在に甘んじるか、男性の創作物の享受者や読者にとどまることを要求された」⁷⁾。それでも著作をする女性には、「せいぜいのところ単なる娯楽的な読み物を作る能力しかないのだという批判が投げつけられ、真に天才的な創造を行える男性の文学と、通

俗的な女性の文学という性別分業がここでも持ち出され」た⁸⁾。

このような状況のなかで、初期ロマン派と呼ばれるグループにあって、カロリーネ (Caroline Schlegel, 1763-1809) という女性はどのようにあり、どのような役割を果たし、どのような自己理解をもっていたのだろうか。

カロリーネについては、名前をいかに表記するか、当惑させられるところがある。苗字が、父親と三回の結婚を反映して、ミヒャエリス、ペーマー、シュレーゲル、シェリング (Michaelis, Böhmer, Schlegel, Schelling) と四つあるので、どの苗字で呼ぶか迷うからである。このような姓の変化は、波瀾万丈な生涯を物語っている⁹⁾。

父ミヒャエリスは、ゲッティンゲン大学のオリエント学者、神学者で、実証的歴史的な研究にもとづいた旧約聖書研究によって、今日なお知られている。この父のもと、大学町ゲッティンゲンで、カロリーネは、主として家庭で教育を受けた。ピアノや歌を習い、フランス語だけでなく、英語とラテン語も学んだ。父の家には、リヒテンベルクやレッシングのような啓蒙主義の作家が出入りし、ゲーテやベンジャミン・フランクリンのような訪問客もいた。女性として大学で学ぶことはなくとも、家に集まる学生たちから直接、耳学問することも多かったにちがいない。同じころのゲッティンゲン大学の教授の娘には、父の熱心な教育を受けて、ドイツではじめての博士号を取得したドロテア・シュレーツァーもいる。

結婚せずに「世間に役立つ人間になりたい」などと女友達に書いていたカロリーネも、結局、1784年に20歳くらいで結婚。医師の夫に従って、ハルツ山中の鉱山町に移り住む。カロリーネは二人の娘の母となり、娘たちの「幸せ」にしっかりと取り組むことをもっとも大事なこととおもいつつ、知的には「家の中で読書したり編み物をしたりする以外に絶望を逃れる気晴らしの手段はない」¹⁰⁾ という退屈を姉妹に訴えている。このような生活のなかで、夫が1788年に急死し、カロリーネは夫の死後生まれた男の子を加えた、三人の子どもをかかえた「未亡人」になる。そののちカロリーネは、ゲッティンゲンの父の家、マルブルクの兄の家と住まいを転々とする。この間、二人の子どもをなくし、のこるは娘アウグステだけになってしまう。

再婚の話を断ったカロリーネは、1792年に、ゲッティンゲン時代の女友達のテレゼのいたマインツに向かった。テレゼはゲッティンゲン大学の古典学者のハイネの娘で、クックとの世界旅行で有名なゲオルグ・フォルスターと結婚していた。ところが、このころすでに結婚は破綻し、テレゼはルートヴィヒ・フーバーと生活を共にするところだった。マインツは、大学や大司教座聖堂のある神聖ローマ帝国選帝侯の居城であったが、1792年にフランス革命軍によって占領された。フランス軍を解放軍として歓迎した市民は「自由と平等のドイツ人友の会」(ジャコバン・クラブ) によって協力し、1793年には「ライン・ドイツ国民公会」の選挙を行い、「ライン・ドイツ自由国家」の独立が宣言される。これが9ヶ月にわたる「マインツ共和国」である。ゲオルグ・フォルスターはその「副大統領」という重要な役割を演じている。カロリーネの亡き夫の父のペーマーは、フランス

革命軍のキュスティーン將軍のもとで「秘書のようなこと」をしていたらしい。この時期、カロリーネはこの世界史的な出来事の状態に参加し、興味深く観察し、手紙を書き送っている。

1793年にマインツはプロイセンを中心とする連合軍に奪回され、「マインツ共和国」は崩壊する。そのとき、フォルスターは、パリに派遣されていたが、カロリーネは逮捕され、娘とともにケーニッヒシュタインに囚われの身となる（1793年）。このときカロリーネは、フランス将校とのあいだの子どもを身ごもっていた。このとき、かつてゲッティンゲンでカロリーネと知り合い、求婚したこともあるアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルが親切に助け、ひどい環境の拘禁状態から別な場所に移すように尽力。カロリーネの息子の洗礼において代父をつとめたのは、兄の依頼を受けてカロリーネ母娘のために心配していたフリードリヒ・シュレーゲルであった。この男の子は生後17ヶ月で病死し、カロリーネはふたたびアウグステと二人きりになる。カロリーネは、ゲッティンゲンには「危険人物」として立ち入り禁止となっていたので、1793年から95年には、ブラウンシュヴァイクの友人のもとで暮らす。この間、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルはカロリーネを何度も訪問し、カロリーネは彼に情熱的な恋愛感情ではないとしても、友情、人間としての誠実さ、「気高さ」、「男らしさ」、「偏見のなさ」を感じている¹¹⁾。

1796年7月、カロリーネはアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルと結婚、シュレーゲルがシラーによって雑誌『ホーレン』（1795年～97年）の編集に誘われたこともあって、イエーナに住むことになる。イエーナではシラーがすでに大学で教えていたし（1789年～99年）、ゲーテは近くのヴァイマルにいて、大学を監督する責任をもっていたためもある。たびたびイエーナを訪れていた。イエーナでは、ラインホルトがカント哲学を教え、1794年からはフィヒテが哲学を教えていた。カロリーネは、シュレーゲルとの結婚によって、「社会復帰」し、シュレーゲル夫妻の家庭は「初期ロマン派」の中心地となっていく。フリードリヒ・シュレーゲルは、一時期兄とカロリーネのところに同居していた。フリードリヒの大学時代いろいろの友人であるノヴァーリスは、婚約者のゾフィーがイエーナで手術を受け、入院していたのを見舞うこともあって、シュレーゲル夫妻とフリードリヒをたびたび訪ねている。

1797年の春、キリスト教の暦の受難週に、ノヴァーリスは、相ついで、婚約者のゾフィーと弟のエラスムスとを亡くす。1797年にノヴァーリスはシュレーゲル夫妻訪問について、次のような手紙をフリードリヒに書き送っている。

「兄上を僕は二度ばかり訪ねた。フィヒテのところにも行った。兄上夫妻は、僕の喜ばしき時間をさらに増してくれた。彼らのところにいると、我が家にいるような感じだ。心がこもっていて、楽しい。あの二人よりも生き活きと生きている人びとはほとんどいないだろう。僕たちはただちに会話の只中に深く入り込んだ。彼らは僕にとっても自由に話させてくれた—そして話してもいいのだということが僕にはわかっていて。僕にとってもっとも重要なことを兄上も認めてくれた。」（ベルリンのフリードリヒ・シュレーゲル宛、1797

年9月5日、IV、235)

シュレーゲル夫妻を中心とした集まりは、のちにドイツ文学史において「初期ロマン派」、「イエーナのロマン派」と呼ばれるようになるゆるやかな結合である。シュレーゲル兄弟は、1798年に雑誌『アテネウム』を発行（第1巻の発行は5月）、これが「初期ロマン派」の機関紙となる（1800年の第3巻で終刊）。このグループのなかで1798年前後に、カロリーネは35歳、アウグスト・ヴィルヘルムは31歳、ノヴァーリスとフリードリヒは26歳であった。レッシングの友人の有名な啓蒙主義者モーゼス・メンデルスゾーンの娘のドロテアは、カロリーネと同年の生まれで結婚していたが、フリードリヒ・シュレーゲルと生活を共にし始め、のちに結婚する。シェリングは、ノヴァーリスと1797年に知り合ったのち、1798年にイエーナの哲学講師に招かれてやはりシュレーゲル家に親しく出入りするようになる。シェリングはすでにフィヒテの影響を受けた哲学書や自然哲学書を出版していたが、まだ23歳という若さであった。このグループの男性はまだ社会の中で地位を確立しておらず、これからという時期で、若い人びとであった。カロリーネとドロテアという女性たちはともに高名な父の知的環境に育ち、結婚し子持ち、カロリーネはフランス革命後の「マインツ共和国」の渦中を経験し、逮捕されたり、未婚の母となったりしているし、ドロテアは夫から離れてフリードリヒと生活をともにしている。大人の女性たちは、ノヴァーリスやフリードリヒやシェリングよりも、10歳くらい年上なのだった。そのような時に、彼らは出会い、時間をともに過ごしたのである。これらの男女の関係性は時間の中で変化していき、「初期ロマン派」グループは、ノヴァーリスの死やカロリーネとシェリングの新たな結びつきなどによって、ある意味若さを保ったまま、解消してしまう。

4. 書簡のなかのカロリーネ～ノヴァーリスとの手紙のやりとりから

今までに述べたことも含めて、カロリーネの経験、表現は、彼女の書簡を資料として構成される。カロリーネの名のもとに出版された作品は存在せず、彼女の手紙だけが遺されている。カロリーネは、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルによるシェイクスピアのドイツ語訳を手伝ったり、劇評や書評や対話など、さまざまな文章を書いているが、すべてシュレーゲルやシェリングの名前で出版されており、カロリーネもそれを当然のように認めている¹²⁾。

カロリーネは書簡によって知られ、カロリーネの書簡は何度も出版されている¹³⁾。この時代はそもそも驚くほど沢山の手紙が男女を問わずに書かれ、取り交わされ、また筆者が重要人物の場合には多く残されている時代である。ドイツでは18世紀半ばに盛んになる「書簡文化」は、市民が「私人」として、自己を表現し、相互にコミュニケーションし、友情を育てる手段となっていた¹⁴⁾。文学者や哲学者の手紙には、重要な思索が表現されており、そのまま論文やエッセイとも呼べるものもある。話題が飛躍するところなどは、

「断章集」に近い。

本稿では、とくにノヴァーリスとカロリーネの間にかわされた手紙を検討する。

(1) フライベルクのノヴァーリスよりドレスデンのカロリーネへ。日曜日早朝、〔1798年9月9日?〕

「うかがうことも、送ることも出来ませんでした¹⁵⁾。一つの自然と世界を建設しなければならない者は、ほんとうに手が離せないのです。貴女とお別れして以来、私は探検旅行、あるいは狩の途上にあつて、きわめて多くを約束する岸辺に至りました。それは、もしかしたら、新たな科学の大陸の境なのです。この海には新しい島々がうごめいています。

古代についての手紙は他のものに铸なおされます。その代わり貴女が受け取るのは、ロマン的な断章、古代訪問、および考古学に関する付録です。貴女が関心をもたれることをほとんど確信して期待しています。すくなくとも、新しさが乏しいということは、これらの文章の欠点ではないように思われます。

フリードリヒとの自然学共同研究(Symphysik)は、私が最近多く重ねた、一般的な哲学的・生理学的実験にとくに関わっています。この様な状況で、形式についてはまだ考えることができません。このことを彼に伝えてください。彼の書き物を先に彼に返します。私のものがいつ推敲され、増やされ、整理されるか、それについてはまだはっきりと言えません。遅くなるのは、私が勤勉でないからではありません。むしろ対象がまだ扱われたことなく、測り知れないほど多様だからです。多様だからこそ、きわめて単純でもあるのですが。ただ、それとして、把握し、保ち、描くのがとても難しいのです。シェリングの「世界の魂」の未熟さの中に深く入り込めば入り込むほど、彼のあたまは興味深くなります。シェリングは最高のものを予感しているのですが、純粋な描出力だけが欠けているのです。描出力こそ、ゲーテを我々の時代のもっとも注目すべき自然学者にしているものです。シェリングは、良く把握しているのですが、保つのはいくぶん苦手で、描出するとなると最も心得ていないのです。

どのくらいドレスデンに留まっておられるのかお知らせください。私の旅行をそれに合わせたいので。いつ貴女がたに何かを送れるか、まだ正確にはわかりません。貴女が会われるであろうフンクによろしく。

ご夫君が、同封した請求書を私に代わって支払って領収書をも受け取ってくださいたら、ありがたいです。口頭で彼にお礼を述べ、立て替えていただいたものを支払います。

エルンストとウィリアムに心からよろしく。すべての人について、貴女がなさっていることすべてについて、特にお話してください。マドンナ〔ドレスデンは、ラファエロの聖母像で有名〕¹⁶⁾が貴女を健康に保ち、私たちの友情を守ってくださるように。

ハルデンベルク

申し訳ありませんがご夫君にお願いできないでしょうか。ヘルモントとフラッドの書籍が必要なのです。ウィリアム〔ヴィルヘルムをイギリス風に呼んでいる〕はダスドルフ

〔ドレスデンの図書館司書〕から14日間借り出して、ただちに私に送ってくれないでしょうか。これに関して興味があるのは、宇宙生成論なのですが、これは些細なことではありません。シェリングは私の発見について驚き喜ぶでしょう。フリードリヒの喝采と共同実践 (Sympraxis) も絶対に確かです。フリードリヒの奔放な精神は、物理的な混沌のなかに不思議な混合と分解をつくりだしました。彼の書いたものは天才的です。天才的な成功と失敗に満ちています。彼に伝えてください。私の手紙は徹頭徹尾新しいものになるだろうし、以前の書き物から取るものは少しだけだろうと。私たちの文通が真の知的酵素 (fermenta cognitionis) をたっぷりを含み、ラヴォワジエの革命以上のものに火をつけると、希望しています。今やまるで普遍的公安委員会〔フランス革命の公安委員会 Comité du Salut public に universel を付け加えている。〕に出席しているような気持ちになります。〕 (IV, 260-262)

ノヴァーリスのこの手紙は、A・W とカロリーネのシュレーゲル夫妻、フリードリヒ・シュレーゲルの共通の話題の輪の中にあり、ノヴァーリスはこの手紙をのちにフリードリヒに転送するように頼んでいる。ノヴァーリスはフライベルクの鉱山アカデミーで自然科学を学んでいたので、自然科学や自然哲学が話題になっている。ヘルモンツやフラッドという、近代の中であって古代自然哲学を生かすような「宇宙生成論」を構想していた思想家と、シェリングのような同時代の最先端の自然哲学者がともに言及されている。自然哲学の「革命」、ロマン主義的な「科学革命」の前夜というような期待に満ちた手紙である。

これは、百科全書の準備のためのノートである「アルゲマイネ・ブルイヨン」にみられる構想に直接的に関わる内容を含むが、このようなことが、カロリーネ宛の手紙に書かれているということは、初期ロマン主義の思考の誕生にとってのカロリーネの重要な位置を表している。

(2) イェーナのカロリーネ・シュレーゲルよりフライベルクのノヴァーリスへ。1798年11月15日。

「きのう貴方の11月7日と11日付けの二通の手紙を同時に受け取りました。なぜこうなってしまったのか、調べてくださらなくてはなりません。私からの手紙も十分に遅れて届いたのですから。あまりはつきりとはしていませんでしたが、貴方から頼まれたことを果たそうと私の心が熱く燃えていること、想像がつくでしょうね。貴方の気毒なお友達〔クリスマスに婚約することになるユリエ・シャルパンティエ〕の病気のことはすぐわかりました。治療法を知っていたならばよかったのですが。その病気がどのような恐るべき程度にまで達するかわかっているものですから、偶然に任せるわけにはいきません。そこで私はシュタルケに手紙を書くことにしました。貴方がフーフェラントよりシュタルケを評価しておられるし、貴方とシュタルケのつながりほど持続的に私もフーフェラントと関わっているわけではないのですから。ただ貴方が直接にはシュタルケに尋ねてみない

何らかの理由を推測しなければなりませんので、私は用心して、貴方があちらのある共通の知り合いについてこれこれのことを書いてよこした、そして私がシュタルケにアドバイスをうかがうようにと頼んできた、と告げました。彼の答えはここにあるとおりです。この答で貴方がたがそちらで一安心されるように願っています。その病を顔面神経痛とただちに認めたのは、〔亡き夫の〕ペーマーがハルツ山地でそれを治療しなければならないことがたびたびあり、治療手段を見つけようと骨をおっていたからです。ある女性の場合、それがひどい痙攣となって、開口不能と水への恐怖に進んでしまいました。彼女はペラドンナによって救われました。処方された薬を使ってみてください。若い医者はそのを了承するでしょうし、自己流の医者として、ご自分の名前において、彼にあれらの本を薦めてはどうでしょう。〔中略〕

まさにハーモニカ〔ユーリエはハーモニカを演奏する〕のような、長い嬉しいお手紙をいただきましたが、今日はお返事しません。急いでいますし、手紙をフリードリヒにただちに転送してしまったので、記憶のなかにしかないからです。私の記憶といえば、大雑把にしか信頼できません。

私たちはまだ『プロピュレーエン』〔ゲーテ編集の雑誌〕を見ていません。私たちはみずから至聖所〔ゲーテ〕をもっているのですから、これらの前庭を必要とすることがありますでしょうか。彼は私たちの只中にいます。～きのう、私は彼と晚餐をともにし、きょうもそうするでしょうし、近いうちに私みずからが宴をもよおします。そのときには貴方もおいでください。～私は『プロピュレーエン』を楽しみにしています。待つのも楽しみです。ゲーテは一冊ももってきませんでした。当地にいくらかあるものを探し回りはありません。ゲーテは一冊ヴァイマルから取り寄せるつもりでいます。序言は父親的な穏やかさに満ちているようです。対するに、あの別の〔註によれば、シュレーゲル兄弟編集の雑誌『アテネウム』〕序言ないし告知のことをことを思い出してみてください。『一般文学新聞』を読んでいるなら、『ヴァレンシュタインの陣営』についての本当の報告も読んだことでしょう。そこに含まれている手紙は巨匠〔ゲーテ〕の手によるものに違いありません。彼は友〔シラー〕のためにこれほどのことをしているのです。シラーはシラーで、序幕とプロローグにおいて巨匠の弟子であり、かつてないほどゲーテ的であるのですが。

シラーの『年鑑』にあるその他のものとは言えば、彼がこれで力尽きてしまったことを示しています。貴方は『年鑑』と『ヴァレンシュタイン』の序幕について私が書いたものを、シャルロッテから手に入れることができます。シャルロッテに頼んではいけませんので、貴方が送ってくれるように申し入れないと、シャルロッテは自分ではそうはしてくれないでしょう。

親愛なるお友達、『アテネウム』に関しては滞っています。フィーヴェックは続けるつもりがあるのか態度をはっきりさせず、ただの商人として小心な振る舞いをみせています。彼はあまりに沢山印刷してしまったのです。1500部も。紙も良すぎて高くつきました。

た。彼の計算によると、もっと支払わないといけないことになります。この雑誌において自分が何かを永続的にもっているのだということがまるで分かっていません。彼はすべてをすぐに清算して、利益を現金で手にしたいのです。彼らはまだ交渉中ですし、これについてさらに詳しく言い広めるつもりはありません。私たちの美しい絵画〔「絵画論」〕は、まだ印刷されていません。それが『プロピュレーエン』に載ると良いと思ったのですが。私の意見は、彼ら、すなわち〔シュレーゲル〕兄弟が雑誌の苦労など背負い込まず、ヴィルヘルムが教授になどならなければいいのに、というものです。ヴィルヘルムは講義の準備に没頭していて、アテネウムの方は大事件でもないようです。フリードリヒにはその分厳しいことになっています、とくに経済的な面で。

あの強情な (trotzig) シェリングがちょうど来ていました。彼はプレヴォを貴方のために用意すると約束してくれました。ル・サーージュを手に入れることは出来ないそうです。

はっきりと書くように努力しました。～どうか私の読みにくい筆跡を読むことに慣れてください。

病気のひとつについて早めにお知らせください、シュタルケに話せるように。ごきげんよう。

私たちは貴方を心から愛しています。」(IV, 502f.)

カロリーネはこの年のクリスマスに婚約することになるユーリエ・シャルパンティエの病気のことを心配し、アドバイスをしたり、医者との関係を仲介したりしている。ユーリエは「ハーモニカ」を演奏したらしく、「ハーモニカ」と呼ばれていることもある。

カロリーネはまた、あちらこちらに移動するフリードリヒとノヴァーリスのあいだの文通をつなげる役目を持ち、彼らの共同研究を応援している。

注目すべきことは、シラーの劇の批評や「絵画論」をカロリーネがヴィルヘルムと共に書いていることである。「絵画論」は、『アテネウム』の第2巻に、W というアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルを示すイニシアルのもとに掲載されているが、8月にシュレーゲル夫妻、フリードリヒ・シュレーゲル、シェリング、ノヴァーリスなどでドレスデンの絵画館を訪問したことをきっかけに書かれ、カロリーネとアウグスト・ヴィルヘルムの合作である。

シェリングについても少しばかりふれられている。『アテネウム』については、出版者とのやりとりなど、実際的なことが話題になっている。カロリーネの実際的な、地に足のついたところがうかがわれる。

(3) フライベルクのノヴァーリスよりイエーナのカロリーネへ。1799年1月20日。

「ご無沙汰していたこの間、私は十分に幸福でした。ユーリエは、あの恐ろしい災いがとつぜん止んだ聖夜以来、まるで奇蹟のように恢復して快活になっています。私の健康はまあまあで、エルンストさん〔シュレーゲル兄弟の姉妹〕に会いました。もちろんほんの

少しの間ですが。またふたたび、今度はもうすこし長い時間会おうと思っています。私のこれからの住所がドレスデンからとても遠いところだというのは、とても残念です。エルンストさんの近くだったらもっといいのですが。彼女が私の心になう女性だと言え、私は心の思いをたくさん語ったことになります。フリードリヒの幸福な関係〔ドロテア・ファイト〕についても心から喜んでいます。私も新しい優れた義姉を得ました。もちろん、可能ならば、法的結婚を好ましく思うものですが。先日のヴィルヘルムの懇ろな手紙はとてもうれしいものでした。それに対して貴女に返信を書いている、かれは許してくださいでしょう。貴女は最近の心のこもった関心と間髪をいれぬ対応によって私にとって、さらに価値ある、親しい方になったのです。

この2ヶ月来、リベラルな物事に属すること、すべてが滞っています。この間に良い考えは三つと思ひ浮かびませんでした。いまや、全身、技術の中に生きています。修業時代も終わり、市民的生活が沢山の要請とともに押し寄せてきているからです。将来の計画のためには、いま材料を集めているだけで、たぶんこの夏に、多くの始めかけたことや企てたことを完成させようと思っています。生き生きとした力、人間とともにあるポエジーがますます私に気に入るものとなっています。自分の周りにポエティッシュな世界を形成し、ポエジーのなかに生きなければなりません。私の重商主義的プラン（mercantilischer Plan）もこのことの一部なのです。私は著作をこのプランの下位に位置づけます。活発に教授業に励んでいるゆえに、ヴィルヘルムに感心しています。このことも、美しい、リベラルな経済（schöne, liberale Oeconomie）、教養ある人間の本来的エレメントに属しているのです。

彼の「悲歌」をじりじりする思いで待っています。それは疑いなく、過去の香りからとった生命物質の、美しい形をとった沈殿物であるでしょう。彼がその中にあらかじめ少しでも未来を溶かし込むならば、結晶はさらに美しくなるでしょう。

『アテネウム』の再興は私には測り知れないほどありがたいことです。フリードリヒの小説については推測したりしません。きっとまったく新しいものでしょう。ティークの『ファンタジー』を読みました。すばらしいものが沢山その中にあるのですが、もっと少ないほうが良かったかもしれません。しばしば言葉をふんだんにばら撒きつつ、意味が控えめになっています。私は、醒めたもの、しかしながら真に前進するもの、先へと運んでいくものを好み始めています。でも、ファンタジーはつねに十分に幻想的であり、そうであらうとしているだけなのでしょう。ティークのドンキホーテ論もすでに発送済みです。早くリッターとシェリングについて書き送ってください。リッターこそ騎士（リッター）で、私たちはその家来にすぎません。バーダーですらお抱え詩人でしかないのです。

ただし、自然のなかの最善のものをこれらの人々ははっきりとは見ていないようです。フィヒテはこの点で彼の友をまだ恥じ入らせるでしょう。ヘムステルホイスは自然学にいたるこの聖なる道を十分に明確に予感していました。スピノザのなかにも、自然理解のこの神秘的な火花が生きています。プロティノスは、たぶんプラトンに影響を受けて、真の精

神をもってこの聖所に初めて足を踏み入れました。そして彼の後いかなる者もふたたびそれほど深くその聖所に入り込んではいません。多くの古い書物のなかには、秘密に満ちた脈が脈打ち、目に見えぬ世界との接触場所を示しています〜いのちの誕生を (ein Lebendigwerden)。ゲーテはこの自然学の祭司になるべきです。かれは、神殿でなすべき奉仕を完全に理解しています。ライプニッツの神義論はこの分野における立派な試みでした。未来の自然学も似たものになります。もちろん、より高いスタイルにおいて。いわゆるフュジコテオロギー（自然学的神学）において、賛嘆に代わる別な言葉がありさえすれば良かったのですが。

これで十分。どうか私のことををよろしく。貴女を包む魔術的な雰囲気の中に留まってください。嵐のような天気のため中でも、惨めな苔人間 (Moosmenschen) のただ中にある、精霊家族 (Geisterfamilie) のように孤立しててください。低次元の必要や心配が貴女を引き寄せて地面に押し付けたりしないように。どうかこの手紙をフリードリヒに送ってください。彼には短くしか書けなかったのです。今、私は、多く地下にいますし、地上では多くの無味乾燥な研究に苦しめられているからです。復活節にはここを去って、4月には貴女の方のもとにうかがうつもりです。私の将来の生活はきわめて魅力的な実り豊かなものとなるでしょう。

すぐに私に手紙をください、できたら『アテネウム』も一緒に。私はあまりに多くのことをごちゃごちゃに背負い込んでいます。復活節のあと新しい空気を深呼吸し、春には私の氷を溶かして温まりましょう。愛なしには生きていられません。沢山の新しいこと、素敵なことは、直接会ってお話します。ヴィルヘルムとアウグステに心からのたくさんの挨拶を。

あなたの 友 ハルデンベルク」(IV, 274-276)

ユーリエとの婚約の静かな喜びが感じられる。ノヴァーリスは、フライベルクの鉱山アカデミーにおける修業の最後の時期に近づき、鉱山にもぐったり、研究したり、忙しい日々を過ごしている。結婚や職業や生活などに歩み入る覚悟を、「重商主義的プラン」「経済」などの言葉で示している。ロマン主義者は、多く、大学教授、裁判官、役人、鉱山技師など、専門的職業をもった人々であった。そのような職業生活と美しい生を結びつける「リベラル」な「教養人」(gebildeter Mensch) や「経済」が理想として思い描かれている。

重要なのは、ノヴァーリスの「新たな自然学」の構想が、滔々と述べられていることである。この箇所はそのまま百科全書準備ノートに載せられている (III, 469)。このような重要なアイディアが、カロリーネ宛の手紙に記されているということは、初期ロマン派のグループにおいて、思想が個人の専有財産ではなく、共同研究、「共に哲学すること」(symphilosophieren) であったということ、カロリーネという女性がそのなかで重要な位置を占めていたということを示している。

(4) イェーナのカロリーネよりフライベルクのノヴァーリスへ。1799年2月4日。

「貴方は、私たちには欠けていて、貴方ご自身ももってはいない重商主義的天才についての熱狂的賛歌（Dithyrambe）によって、私を怒らせたのですが、私よりはましでした～少なくともご自分について知らせてくださったのですから。私は、必要な伝達をエルンストとのクリスマスの会話に完全にまかせるつもりで、貴方を書くよりも、貴方のことを想うことのほうが多かったのです。やっと、想うことと書くことが一つになります。

貴方は体調不良について書いていますが、私はそのことに関してはあまり心配していません。文章のあいだにたえず陽気な気分がたっぷり顔をのぞかせているからです。それに貴方の刺激受容性からすると、貴方は無駄に過ごす時間をいつももっていなければならないのです。貴方が名づけた慰めの言葉、愛、のほうかはるかに私の心に迫ってきます。いかなる愛？何処なのか？天上なのか、地上なのか？貴方が口頭で私に伝えたいというのは、どのような素敵なこと、新たなことなのでしょう？どうか、すぐに実行してください、それほどめんどろなことでなく、はっきりしたことなものでしたら。貴方もご存知のように、貴方に対する愛だけがある場所では、貴方が語れないような愛はありません。じっさい、貴方の手紙の文末には重要な意味を置いてもよろしいのでは？貴方が私に話してくださるまでは、黙っていることにいたしましょう。

貴方のその他の内的な忙しさは、私のあたまを熱くします。私がいかに貴方がたの本質をわかっていないか、貴方のしていることをそもそもいかに少ししか理解していないか、貴方には信じられないでしょう。私は倫理的な人間性と詩的芸術についての他は、結局のところ何も知らないのです。私は貴方が折にふれて伝えてくださるものをすべて喜んで読みますし、個々のものが私にとっても繋がった一連のものとなり、貴方の書いていることが貴方のものであるからという理由だけで私を喜ばせるのではない瞬間が訪れることは疑っていません。貴方がたが皆でやっていることは、私にとっても真の魔法鍋なのです。まずは私に打ち明けてください、それが貴方の印刷された作品に結実するのか、あるいは、貴方がきわめて立派に人工的に、また単純にも構築している自然（Natur）が、貴方自身の立派で芸術的な本性（Natur）とともに、この大地にとっては、滅びてしまうべきなのかを。貴方が書いていらしたことから、貴方が一つの作品を企てているときに、それは本になるはずなのか、はっきりと説明できませんし、貴方が愛しているとき、それが諸世界の調和なのかハーモニカ〔ユーリエ〕なのかわからないのですよ。

リッターについて何をお伝えできるというのでしょうか。彼はベルヴェデーレに住んでいて、そこでは有り余って生息していてここでは不足している、たくさんのカエルを送ってよこします。ときには彼はみずからカエルに付き添ってきますが、私はまだ彼に会ったことがありませんし、他の人たちは彼は私と三言だって話せないだろうし、話したがりないだろう、と断言するのです。私が思うに、彼はただ一つの感覚（Sinn）しかもっていません。それは、傑出したものであるにしても、かれの学問のためにもちうる最高の感覚ではないでしょう。最高の感覚は多くの感覚からなるのです。シェリングは、もしも貴方が

リッターに何か言いたいことがあるなら、リッターにあてて書いたほうがいいと言っています。リッター自身がぜんぜん書けないだろうとしても問題ではないでしょう。貴方は春にはリッターに会うことになるでしょうから。～シェリングについてですが、これほど堅い殻はいまだかつて存在しませんでした。彼といると6分とたたないうちに口論となることは別として、とにかく彼は広く見渡して私の知るなかで、もっとも興味深い存在であり、私たちが彼ともっとしばしば会い、親しくなれたらと願っています。そうなればいさかいもあるでしょうが。彼は常に私とシュレーゲル家のイロニーを見張っています。シェリングには陽気さがまったくないので、イロニーから陽気な面を取り出すことも簡単にはできないのです。彼の根を詰めた研究はしばしば外出を妨げることもあります。おまけに彼はニートハマーのところに住んでいて、そこは彼がすくなくとも気分よく感じられるシュヴァーベン人に占領されているのです。彼がそれほど気楽にはしゃべったり、自分の考えを学問的に伝えたりできないとすれば、それは彼が一種の緊張のなかにいるからなのですが、それをどうやってほぐすべきかはまだ謎です。先日、私たちは彼の24歳の誕生日を祝いました。彼にはまるやかになるだけの時間がまだあります。そうなれば彼は、敵と見なす人びとに対する果てしない憤怒をも捨てることになるでしょう。フーフェラントと呼ばれるものすべてに対して、彼は憤慨しています。一度は、フーフェラントがいるなら、私たちのところに来ることはできないと、言っていました。しかしフーフェラント自身がシェリングを招いたら、出かけていったのです。私はこの一貫していない態度をわざと非難しませんでした。シェリングは抑えきれないほど多様な性格をもっているのです、彼の性格に警告を発するにはおよびません。～すでにお伝えした、ノルウェー人のシュテフェンスは、当地の社交のなかで、ずっとうまくやっています。当地の社交に彼もつかまってしまっているようで、果たしてフライベルクに行くかどうか疑問です。シュテフェンスのこと、貴方も感じ良く思うことでしょう。私たちにとってもそうなのですが、私は彼のことを完全には判断できません。というのも私が十分には知らない分野で、彼がどの程度の域に達しているのか、私にはわからないからです。彼に不足していて補うべきは、まさに哲学なのです。～フィヒテの中のすべてとフィヒテに由来するものすべては、私には明らかです。シャルロッテに、フィヒテの「訴え」を貴方に送るように頼みました。フィヒテが貴方によろしくとのこと。フィヒテにまた伝えられるように、それについて何か書いて送ってください。この件についてどう思いますか？ラインハルトについては？フィヒテが彼をシュパルディングとヤコービの間に位置づけていることについては？～フィヒテが殉教に置いたアクセントは、いささか強すぎました。その他には、すべてが明るく、感動的です。それを読んだとき、私はうっとりとした、この世ならぬ気持になりました。ドレスデンではまだ手に入らないでしょう。～貴方の父上へ送るようにフィヒテを説得しましたので、フィヒテがそうしたと思います。無神論〔論争〕に続く最新の出来事は、ヴァレンシュタインの第一部、ピッコロミニのヴァイマルでの上演です。私たちはこの作品を観劇しましたが、私の思うところ、すべてが優れていると同時に、欠陥が多

くもあるのです。素材を引き伸ばして二つの劇にしたことによって、全体の効果が損なわれています。でも、劇的なものには、貴方は興味ありませんでした。～私たちに残されたいくらかの瞬間をこの話で奪いたくはありません。ゲーテは二月をここ〔イエーナ〕で過ごしました。「悲歌」はまだ完成しておらず、『アテネウム』はやっと半分印刷されました。

フリードリヒについては、何も書きません。ファイト〔ドロテア〕と『ルツィンデ』を見るまでは。私たちは、復活節のまえの週に、彼ら〔フリードリヒとドロテア〕が夏のあいだ滞在する予定のベルリンに行きます。親愛なるハルデンベルク、わたしたちと一緒に行きましょう～ナウムブルクで落ち合えるでしょう。そうになったらなんと素敵なのでしょう。真剣にそのことを考えてみてくださいな。

私たちは勤勉で、とても幸福です。この年の初めから、私はヴィルヘルムの書斎からほとんど出ないくらいです。私は、シェイクスピアの二番目の作品〔「お気に召すまま」〕を訳しています、イアンボス〔弱強格の韻律〕や散文、押韻詩句にさえも。アデュー、この手紙を送り出さなくては。
カロリーネ・S〕(IV, 518-520)

カロリーネは、ノヴァーリスやフリードリヒ・シュレーゲルやシェリングやシュテフェンスが共通して研究している自然科学が、彼女の理解を超えた分野だということを率直に語っている。関心をもちつつも、自然科学研究にどっぷりと浸かって専門用語で語るのは、カロリーネの姿勢は、ロマン主義的な自然学が、古代自然哲学にもつながる、日常生活世界に通路をもつ自然学として成立するに当たり、隠れたおおいなる力を発揮したのではないか。

24歳の誕生日をむかえたシェリングのことは、若い弟に対する姉のような視線で見ている。リッターやシュテフェンスのことについても、ユーモアある調子で書いているが、これらの発展途上の自然哲学者たちに比して、カロリーネの世間慣れした様子がうかがえる。

フィヒテの無神論論争が話題になり、カロリーネはフィヒテを支持している。

手紙の最後にふれられているように、カロリーネはシェイクスピアのドイツ語訳の最中である。自分の仕事があウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの名前で出版されるであろうことは、カロリーネにとっては自明のことであり、とくに意識されていない。

(5) イエーナのカロリーネよりフライベルクのノヴァーリスへ。1799年2月20日。

「友よ、ではやはり真実なのですね？貴方は私たちをほんとうに幸せにし、喜ばせました。いままで貴方の友人たちは、貴方のことだけを考え、貴方の未来のことは考えずにいるほかありませんでした。そして貴方はすべての心配を謝絶していました。でも、私自身は受け止めていました、好ましく思われる人々にたいして、人は容易に素直に従順になるものだ。いかにしたらその結び目がほどけるのか、貴方にお尋ねしたことはありません

わよね？こうでありつづけるほかないのか？私みずからにもほとんど自問もしませんでした。私は信仰のなかにあって落ち着いていました～というのも、私は、貴方がたすべてよりも多くの信仰をもっているのです～こうなるだろうとわかっていたというわけではなく、どなたかの胸に抱かれて緊張が解け、天上的なものが地上的なものと結婚するにちがいないと。貴方が両者の分離と呼ぶことは、融合なのですから。そうならないわけがあるでしょうか？地上的なものはまた真に天上的なものでもあるのではないのでしょうか？なんとでもおっしゃい、とにかく、貴方は幸福なのです。貴方の手紙は歓喜にあふれ、まるで翼に乗って私のところに届いたかのようにでした。～このようにならねばならなかったことを思うと、貴方がそうなるであらうように、私はいま喜んでいます。ただ、このほとんど荒涼とした孤独のなかで、甘い習慣の絆によって貴方は徐々に獲得されえたのでしょうか。これらのことすべてが危険ではないということを、かつて貴方はなんと賢く優雅に解き明かしてくださったことでしょうか。危険ではないとしても、その影響はあるでしょう。愛すべきものはなんの代償もなく存在しているのでしょうか。ユーリエに会わなかったことは二重に残念です。それは私のせいでありませんし、貴方のせいでもないでしょう。～親愛なるハルデンベルク、貴方の妻が彼女自身によって、彼女自身の好みによって、私たちの友にならず、貴方が私たちのものでありつづけないとしたならば、私は悲しくなります。是非いらしてください、このことについてさらにおしゃべりしましょう。たぶん私たちは復活節のころにはまだ当地にいて、聖霊降臨節のころになってから旅行するでしょう。

貴方はおそらく私たちに何もいわないようにシャルロッテに厳命したのでしょうか。推測するに、クリスマスころにはこのことを知っていたのに、我慢して黙っていたのでしょうか。シャルロッテは、シャルパンティエ〔ユーリエ〕と貴方を一緒に招いたと書いています。彼女が手紙好きでないのは幸運でした。口頭でだったら、彼女は私に話してしまっただしょうから。フリードリヒはすでに予感していましたが、私が確かさを与えました。

今年中にも私たちすべてを一つの屋根がまとめるということも、ありそうなことです。フリードリヒはこの夏ベルリンに残っていますが、私にもそのほうが好都合です。彼は冬にはこちらに来るつもりです。貴方はヴァイセンフェルスにおられますが、いつかある期間、ここで生活できるのではないのでしょうか。父上とはすべてをよく相談してあり、障害になる困難はないのではありませんか？貴方が快活であれば、父上もお喜びでしょう。ティールマン〔ノヴァーリスの友、ユーリエの姉の夫〕は大喜びするにちがいありません。貴方のもう一人の義兄のほうはフィヒテにまかせましょう。

ラインハルト〔ドレスデンの神学者・宮廷付き牧師、ユーリエの姉の夫〕が〔無神論論争でフィヒテを非難している側に〕協力していることを確信したならば、フィヒテが彼を〔レッシングのように〕第二のゲッツェに仕立て上げることに疑いありません。フィヒテは、まだそう信じようとしませんし、その確信を得るために、事実を欲しているのです。フィヒテは最近の郵便でみずからラインハルトに手紙を書き、「訴え」を送り、彼に

聖職者支配を乗り越えるように要請しました。フィヒテはどのような答えが戻ってくるか待つつもりです。確かなことをご存知か、私にだけ書いておしらせください。私は一瞬も疑っていませんが、フィヒテがあまりにあからさまに振舞ったので、フィヒテを攻撃する事実をもちだせることになってしまったのです。それはそうとフィヒテには貴方の情報はとても重要です。私はフィヒテに貴方の手紙の大部分をつたえました。～フィヒテは貴方のことをとても好きなのですから～それに、貴方に関することをフィヒテは心から喜んでいました。プロイセンでは〔ザクセンよりも〕まっとうだということを、貴方はいまに知るでしょう。

もうまもなく、『アテネウム』の第三分冊が出ます。この間に少し変化がありました。『ルツィンデ』について、貴方はなんとおっしゃるのでしょうか。「リュツェウム」の断章を思い出しました。それはこのように始まります「サッフオーの書いたような詩が成長しなければならない、あるいは、見出されなければならない」と。見てみてください。今のところ、私はこの小説をジャン・パウルのものより以上に小説であるとは認めていません。それと比べるわけではありませんが。それは想像していたよりもずっと幻想的です。貴方の好みに合うかどうか、私におしらせください。著者にこれほど近いと、印象はもちろん純粹ではありません。私はいつもフリードリヒの、打ち解けない性格とこのような野放図なところをひとまとめに受け止めていますし、堅い殻が割れるさまを見ています～それには心配になります。もしも私が彼の恋人なのだとしたならば、あのようなものが印刷されるのを認めはしなかったでしょう。とはいえ、このことすべては、とんでもなく悪いことではありません。呪ったり、非難したり、なければいいと思ったり、変えたりできない物事があるのであって、フリードリヒがしていることは、概してこういうことなのです。

ヴィルヘルムは「悲歌」を終えました。写しを当地に滞在しているゲーテとフリードリヒがもっています。ですから待っていただかなければなりません。詩の本来の部分は教訓的なものと言えるでしょうが、ヴィルヘルムの意見では、そうでなくてはならないのです。個々の部分の描写はすばらしいのですが～全体は、一つのものとして魂に受け取られるためには、ひょっとしたらすこし広範囲に渡ってすぎるかもしれません。すくなくとも落ち着いた集中できる雰囲気が必要です。貴方はこの詩をここで読むべきです。これは、『アテネウム』の〕第四分冊に入ります。

こちらにいらしたら、どうかすぐに私たちの所に寄ってください、そうしない理由が別がないのだとしたら。それが貴方とシラーとの交際の妨げになることは絶対にありません。4月の半ばに完全な『ヴァレンシュタイン』が劇場にかかります。観るつもりはありませんか？

ゲーテは『プロピュレーエン』のための光学にかかりきりで、公の場所には姿を現しません。

お元気で。私はシャルロッテにも手紙を書かなくてはなりません。シャルロッテに『ルツィンデ』のことを伝えてください。」(A・W・シュレーゲルが続けている部分を略す。

IV, 521-523)

残されていない手紙でノヴァーリスが婚約を打ち明けた様子で、カロリーネはそのことにふれている。最初の婚約者ゾフィーが亡くなったあとのノヴァーリスの心境は「日記」に記されているが、カロリーネはノヴァーリスの新たな婚約を「天上的なものと地上的なもの」の「結婚」と受け止めている。グループに新たなメンバーが加わるのがどのような結果をもたらすかに関する懸念が微妙な表現で語られていて、初期ロマン派とのちに呼ばれることになるこのグループが、知的に対等な男女両性からなる、この時代にしては珍しいグループであることがわかる。カロリーネは同時代や仲間のさまざまな作品を率直に批評している。

こののちノヴァーリスからカロリーネにあてた手紙が一通のこされているが、本稿ではそれにはふれることができない。

5. おわりに

カロリーネは、手紙と会話による社会的な共同性のなかで、初期ロマン主義思想の展開に寄与している。カロリーネは、1789年の手紙に「私は、自分の心が自分に与えてくれるもの以外にはもう何も尊重せず、自分が自分で与えるもの以外には何も獲得しません」と書いているが¹⁷⁾、彼女はこのフィヒテ哲学の「自我」のような自分を、みずから実践的に生き、経験してきたという豊かな過去を背負って、十八世紀末のイエーナにいた。フリードリヒ・シュレーゲルは「フランス革命とフィヒテの知識学とゲーテのヴィルヘルム・マイスター」を「時代の最大の傾向」(die größten Tendenzen des Zeitalters)だと、断章に書いている¹⁸⁾。カロリーネは、これらの「時代の傾向」をある意味で体現している。カロリーネは、彼女より若い発展途上の男性たちに対して、初期ロマン派グループの成立していた時期には、知的エネルギーないし自信を与える存在となっていたのではないか¹⁹⁾。

イエーナに中心をおくこのグループにあっては、「共同」で考えたり、研究したり、作品を書いたり、批評しあったりすることが、創造の重要な要素としてあった。そのなかで、カロリーネのような女性は、触媒的な役割を果たしている。それは、たんなる副次的な補助的な役割でなく、創造にとって本質的に重要な役割である。たとえば、初期ロマン主義の自然哲学が、哲学と自然科学の専門的世界に閉じこもらずに、幅広い内容と詩的な表現をそなえたものとなったことの背景には、職業や専門から自由な、女性と男性の両方から構成される社交の場があるのではないか。そのことの一端は、たとえば、シェリングが、妻となったカロリーネの没後に書いた、対話篇『クララとの対話』にうかがえる²⁰⁾。

ノヴァーリスは「知と所有」に対して「信仰と愛」をと訴えている。知的財産権や著作権など、「所有」につながる問題はテーマとなっていない。カロリーネは、絵画論や劇評を書き、翻訳をしたが、カロリーネの仕事は、彼女の名前で発表され彼女の作品とされる

ことはなかった。人びとの知的な刺激的な集まりのなかで、創造的な活動が育まれることは、ヨーロッパの思想史をみているとしばしば起こっている。

初期ロマン主義のグループにおいては、「女性の創造力」は決定的に重要なかたちで働いていた。そもそも創造力は、目に見える成果によってのみ測られるものではない。「創造」における精神的なもの、霊的なものは、それとしてはっきりとは見えない。生成、プロセスが大切である。「成果主義」「知的財産権」「創造性」などの言葉が沢山目につく21世紀はじめの現代であるが、現代の問題を解決するためには、「創造」についての新たな発想と環境が必要なのではないだろうか。

注

- 1) 中井章子『ノヴァーリスと自然神秘思想—自然学から詩学へ』創文社 1998年、第2章、参照。
- 2) Novalis Schriften. Die Werke Friedrich von Hardenbergs. Hrsg. v. Richard Samuel in Zusammenarbeit mit Hans-Joachim Mähl und Gerhard Schulz. Bd. III, Stuttgart 1968, S. 462, Nr. 1036. ノヴァーリスのテキストはこの校訂版によって引用し、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示す。
- 3) ペーメについては南原実『ヤコブ・ペーメ 開けゆく次元』哲学書房 1991年、参照。
- 4) 星野純子『ゲーテ時代のジェンダーと文学—「金のりんごを盛る銀の皿」』鳥影社 2005年、第2部、第1章参照。
- 5) Vgl. Barbara Becker-Cantarino: Schriftstellerinnen der Romantik. Epoche-Werke-Wirkung. München 2000, S. 11.
- 6) 星野純子、前掲書、第2部、第1章、参照。
- 7) 星野純子、前掲書、101ページ。
- 8) 同上。
- 9) 以下、カロリーネの生涯について、野口薫「ゲッティンゲン大学教授の令嬢たち」、『ドイツ女性の歩み』（河合節子・野口薫・山下公子編）三修社 2001年、およびギゼラ・ホーン『ロマンを生きた女たち』（伊藤秀一編訳）現代思潮社 1998年、参照。
- 10) カロリーネの手紙、伊藤秀一訳、前掲書、26ページ。
- 11) カロリーネの手紙、伊藤秀一訳、前掲書、65ページ。
- 12) Barbara Becker-Cantarino、前掲書、S. 58f. 1802年1月11日付け、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル宛の手紙に、自分が書いた劇評（「イオン」A・W・シュレーゲル作、ゲーテ演出）をシェリングの名前で送ったこと、シェリングと二人で女性的な箇所を削ったことを書いている。A・W・シュレーゲルにはこの劇評が気に入らなかったらしく、カロリーネはギリシア語を知らず、ギリシアからとった素材の悪い訳すら読んでいないのだから、批評する資格がない、と非難している。Barbara Becker-Cantarino は、「自分の妻の作品をコントロールするという考えは、1800年ころに始まる社会の復古的雰囲気やロマン主義世代が歳をとるにつれて形成される態度」だ、と述べている（S. 59）。
- 13) Caroline. Briefe aus der Frühromantik. Nach Georg Waitz vermehrt und hrsg. von Erich Schmidt. Leipzig 1913. 2 Bde. がもっとも包括的な書簡集で、そののち出版された版の元となっている。

- 14) 渡邊洋子「手紙を書く女たち」、田邊玲子編『ドイツ／女のエクリチュール』勁草書房 1994年、69-97ページ、参照。
- 15) 以下も含め、手紙の中のアンダーラインは、手紙の筆者による。
- 16) [] は中井による補足。
- 17) K・H・ボーラー『ロマン派の手紙—美的主観性の成立』（高木葉子訳）法政大学出版局 2000年、245ページより引用。
- 18) Friedrich Schlegel: Charakteristiken und Kritiken I (1796-1801), Hrsg. v. Hans Eichner, München-Paderborn-Wien 1967, S. 198, Nr. 216 (Athenäums-Fragment).
- 19) ボーラー、前掲書（高木葉子訳）、245ページによれば、「規範に対して自我の絶対的自由を強調的に発見すること」である「ロマン主義的な主観性」、「自我の優位」が、カロリーネにおいて「発見的に直感されたし、またフランス革命前後の私的な出来事と同様に、思考において省察された」。
- 20) シェリング「クララとの対話」（中井章子訳）、『キリスト教神秘主義著作集 第16巻 近代の自然神秘思想』教文館 1993年。